趣旨説明

どうすれば良い問いをデザインできるか
―高校の探究と大学の研究の共通点を探る―

長谷川　豊（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室長／京都府立大学 公共政策学部 准教授）

（スライド１）おはようございます。高大連携推進室の室長の長谷川です。第 21 回高大連携教育フォーラムの趣旨説明をさせていただきます。皆さまのお手元にはございませんが、スライドがたくさんあります。要点の部分だけお目通しいただければと思います。

（スライド２）まず、一昨日の 11 月 30 日、ＣｈａｔＧＰＴが公開されて１年になりました。大学、あるいはさまざまな教育機関、研究機関で大きく利用されていると思います。大学でも、どのように対応していくか、まだまだ考えているところです。つい先日、さらに頭の中で考えていることが映像化できるという話まで出てくる世の中になってきました。こうした科学技術の発展の中で、何が起きるのか、どういうことになるのかというなかで、どのような教育をすれば良いのか、どのように学生、高校生を育てていけば良いのかが、このフォーラムでも議論になっていくだろうと思います。

（スライド３）今年、高校・大学に関わって大きな動きを申しあげると、第４期教育振興基本計画が６月に閣議決定されました。このコンセプトの１つは、昨年の第 20 回高大連携教育フォーラムのテーマに挙げた「持続可能な社会の創り手の育成」です。これを挙げた理由として、中央教育審議会の 2021 年答申にもあった「一人一人の子どもを主語にする」という学習者の視点です。昨年、ご登壇いただいた荒瀬（克己）先生が常からおっしゃっている点が強調されています。今回のフォーラムへの１つの示唆であると思っております。

（スライド４）この計画の目標では、幾つか高校・大学に関わるものが挙げられています。太字の部分を見ていただくと、「多様な個々の状況に応じた学び」や「探究」、あるいは「生徒の学習意欲」、「多様な学習ニーズ」に対応していくこと、今後５年間で重点的に行われていくとされています。

（スライド５）高校教育改革について、高校・大学では、「文理横断的・探究的な教育」が重要になってきますし、大学でも文理横断型の教育プログラムを開発し、進めていくべきだと言われています。高大接続改革に関わって「学校段階間・学校と社会の接続の推進」の項目で、「学びの継続と発展・高度化という視点」、すなわち高校から大学へと、本日のテーマにもつながります。探究から研究へと、高校生、そして大学生の学びの視点に立って、今回のテーマとして掲げるにふさわしいと考えました。

（スライド６）一方で探究の点は、「イノベ

ーションを担う人材育成」が強く言われています。後でも述べますが、とりわけ今後の大学のあり方という点で、高校時代に培われた探究する力をさらに続けて、どのように発展させていくかが問われているところです。

（スライド７）大学をめぐっては、高校もそうですが、日本の大きな傾向である少子化の問題です。急速な少子化の中で、高等教育はどうあるべきか、中教審は文部科学大臣から諮問を受けたところです。大学では、とりわけ「研究力の強化」問題に焦点が当てられています。教育も、「学修者本位の教育」に転換を図っていますが、教育と研究の両輪でどのように行っていくかは、大学教育、研究に関わっている大学関係者にとって大きな課題です。もちろん、大学へ送り出される高校の先生方にとっても、今、実施されている探究的な学びがどのようにつながっていくのかは、関心があることかと思っています。

（スライド８）さらに、最初に申し上げたＣｈａｔＧＰＴに見られる「ＡＩには果たせない真に人間が果たすべき役割」を、小・中・高・大を含めて考えていく、取り組んでいく必要があります。そういった人材育成が強調されており、それが個人にとっても、社会にとっても、「ウェルビーイング（Well-being）の実現」につながるとされるところです。

（スライド９、10）こうした中で、皆さんも事前にチラシ等を見ていただいたかと思いますが、本フォーラムの趣旨ですが、深い学びと問いを見つけることで探究が始まるために、良い問いを見つけるにはどうすれば良いか。それは、多様で複雑な問題の本質を捉え、課題を設定し、総合的な解決へ導いていけるような問いをデザインする力です。これは、高校からではないと思います。小学生、中学生から、総合的な学習の時間だけではなく、今の学校現場で取り組まれている学びが、そのような学びであって、高校へ、さらに大学へつながっていくものだと思います。こうした問いに関わる議論が、さまざまな著書が刊行されている最中でありますので、本年度は問いに焦点を当てて取り組みたいと考えました。

（スライド 11）「良い問いとは何か」、「問いのデザインとは何か」については、ビジネスでも問われています。今から 20 年前、齋藤孝先生が『質問力』という本を出されました。当時は「質問力」ということが随分言われ、今でもビジネス関係では「質問力」という言葉が出てきます。それは、他者にどう質問していくかという力です。問いの場合は、他者への問いもありますが、自分への問いでもあろうかと思います。

（スライド 12）それでは、どのように教育の場で行っていけばいいか、今回のテーマを議論したときに、ダン・ロススタイン氏らの「質問づくり」に着目をしました。そうしたことができるようなフォーラムにしたいと、大学・高校両者で共有したいということで準備を重ねてきたところです。

（スライド 13～15）この後の鼎談でファシリテーターをしていただく塩瀬（隆之）先生も『問いのデザイン』という著書を出されています。本日、ご登壇いただく藤原（さと）先生は、今年５月に『協働する探究のデザイン』という著書を出されています。ホットな話題だとお考えいただいたということで、これだけの多くの方に来ていただいたと思っています。そのほか、昨年のフォーラムでご登壇いただいた酒井（淳平）先生も、今年、著書を刊行されたことも紹介させていただきます。

（スライド 16～18）このような出版状況等を踏まえ、「問い」が高校生、大学生を問わず、教育上の大きな課題になってきていることから、今回のフォーラムで取り上げます。詳細は省きますが、「子どものための哲学」でも「問い」が強調されていますし、国際バカロレア（ＩＢ）の学習者像は、「問い」の当事者である学

習者に焦点を当てています。探究する際には自らの問いが重要になっていると、国際バカロレアにかかわる議論では行われています。

（スライド19）「探究」における「問い」については、学習指導要領を見れば一目瞭然かと思います。目を通していただければと思います。

（スライド20～22）単なる問いではなくて、「学習者自身の問い」に焦点が当てられています。誰かが問いを与えてあげるのではなくて、自分から問うていくその主体に焦点を当てている、というのが本日のフォーラム視点です。この後、基調講演を２つお聞きいただき、鼎談で深めていただいて、さらに第２部の分科会で、それぞれの教科、分野で検討していただければと思っています。

（スライド23）本日は、久しぶりに対面で行います。最後には情報交換会も行いますので、ぜひご参加いただければと思っております。ご清聴、どうもありがとうございました。

スライド１

第21回 高大連携教育フォーラム

どうすれば良い問いをデザインできるか
－高校の探究と大学の研究の共通点を探る－

趣旨説明

京都高大連携研究協議会
大学コンソーシアム京都 高大連携推進室
長谷川　豊（京都府立大学）

スライド２

スライド３

「第4期教育振興基本計画」(2023-2027年度)
2023年6月16日閣議決定

2つのコンセプト　「一人一人の子供を主語にする」学習者の視点
中教審答申「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(2021)

第20回フォーラムのテーマ

持続可能な社会の創り手の育成

- 将来の予測が困難な時代に、未来に向けて自らが社会の創り手となり、持続可能な社会を維持・発展させていく人材を育てる
- 主体性、リーダーシップ、創造力、課題設定・解決能力、論理的思考力、表現力、チームワークなどを備えた人材の育成

日本社会に根差したウェルビーイングの向上

- 多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなるよう、教育を通じてウェルビーイングを向上
- 幸福感、学校や地域でのつながり、協働性、利他性、多様性への理解、社会貢献意識、自己肯定感、自己実現等を調和的・一体的に育む

スライド４

目標1　確かな学力の育成、幅広い知識と教養・専門的能力・職業実践力の育成

学校段階間・学校種間及び学校と社会との連携・接続を図りつつ、各学校段階を通じて、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力、人間性等の確かな学力の育成、幅広い知識と教養、専門的能力、職業実践力の育成を図る。その際、**初等中等教育段階**においては、同一年齢・同一内容の学習を前提とした教育の在り方に過度にとらわれず、**多様な個々の状況に応じた学びの実現**を目指す。

【基本施策】

〇高等学校教育改革

・「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、**普通科改革や探究・STEAM教育、先進的なグローバル・理数系教育**、**産業界と一体となった、外部リソースも活用した実践的な教育**等を通じて、**各高等学校の特色化・魅力化**を促進し、**生徒の学習意欲を喚起**するとともに、**地域、高等教育機関、行政機関等との連携**を推進する。また、オンラインを活用した**学校間の共同授業の実施、学校間の単位互換や学校内外の多様な学びの連携**を推進するとともに、高等学校と関係機関等との連携協力体制の構築を担う人材(コーディネーター)の配置や育成を推進する。あわせて、**生徒の多様な学習ニーズ**へのきめ細かな対応の充実に取り組み、高等学校教育の質保証を行う。

スライド５

〇文理横断・文理融合教育の推進

・**文理横断・学修の幅を広げる教育プログラム**を構築・実施する**大学**等の取組を支援するとともに、その成果等の情報発信を通じて取組の普及・展開を図る。また、**高校における早期の文系・理系のコース分けからの脱却等に向けて、高校普通科改革等による文理横断的・探究的な教育を推進する。**

・大学間連携や地域社会のリソースを結集したプラットフォーム形成を通じて、**課題解決を含む文理横断型の教育プログラム**を構築し、**地域の高度化やイノベーション創出を担う人材を育成**する大学等の取組を支援する。

〇学校段階間・学校と社会の接続の推進

・小中一貫教育を実施する際に参考となるカリキュラム編成や指導体制の在り方等に関する情報発信に取り組むとともに、中学校と高等学校との接続についても、各地方公共団体等における特色ある取組の情報収集・発信等を通じ、その推進を図る。また、**学びの継続と発展・高度化という視点から、高大接続改革の着実な推進を図る。…**

スライド６

目標5 イノベーションを担う人材育成

複雑かつ困難な社会課題の解決や持続的な社会の発展に向けて、**新たな知**を創り出し、**多様な知**を持ち寄って「**総合知**」として活用し、**新たな価値を生み出す創造性**を有して既存の様々な枠を越えて活躍できる、**イノベーションを担う人材**を育成する。

【基本施策】

〇探究・STEAM教育の充実

・学習指導要領を踏まえ、児童生徒が**主体的に課題を自ら発見し、多様な人と協働しながら課題を解決する探究学習**や**STEAM教育等の教科等横断的な学習**の充実を図る。

・「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、**普通科改革や先進的なグローバル・理数系教育、産業界と一体となった実践的な教育等**を始めとした**高等学校改革**を通じて、**地域、高等教育機関、行政機関等との連携**を推進する。

・**生徒の探究力の育成**に資する取組を充実・強化するため、**先進的な理数教育を行う高等学校等を支援する**とともに、その成果の普及を図る。

・**探究・STEAM・アントレプレナーシップ教育**を支える**企業や大学、研究機関等と学校・子供をつなぐ**プラットフォームの構築や、日本科学未来館やサイエンスアゴラ等の**対話・協働の場等を活用したSTEAM機能強化や地域展開等を推進する。**

スライド 7

中央教育審議会「急速な少子化が進行する中での将来社会を見据えた高等教育の在り方について」（諮問） 2023年9月25日

- …少子化の進行…コロナ禍を契機として遠隔教育が急速に普及…国際情勢が不安定化し、世界経済の停滞や国際的分断の進行の懸念…留学生交流や高等教育機関の国際交流も大きな転換期…我が国の研究力低下が指摘されている中で、研究力の強化が喫緊の課題となっています。
- …文部科学省では、**2018年の答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」**…以降、学修者本位の教育への転換を図り…**高等教育の質を高める**ための取組を行ってきました。また、教育と両輪である研究についても、**国際卓越研究大学制度や地域中核・特色ある研究大学強化促進事業などの仕組みを創設**…。一方で、**初等中等教育段階においては、GIGAスクール構想による1人1台端末等のICT環境の整備の進展や、高等学校での「総合的な探究の時間」等における問題発見・課題解決的な学習活動の充実など、今後高等教育機関へ進学する生徒の学びにも変化が見られます。**（中略）

スライド 8

- …**一人一人の実りある生涯**と我が国の持続的な成長・発展を実現し、人類社会が調和ある発展をしていくためには、**人材育成と知的創造活動の中核である高等教育機関**が一層重要な役割を果たすことが求められます。とりわけ、今後の**複雑に変化する社会**においては、基礎的で普遍的な知識・理解と汎用的な技能に加えて、その**知識を活用でき、ジレンマを克服することも含めたコミュニケーション能力を持ち、自律的に責任ある行動をとれる人材**を育成することが特に重要となっています。学生が**文理横断的**にこうした知識、スキル、態度及び価値観を身に付け、**AIには果たせない真に人が果たすべき役割を十分に考え、実行**できるよう、高等教育機関においては、初等中等教育段階における取組も踏まえ、そのような人材の育成に取り組むことが必要となります。…人材の育成が、ひいては**個人及び社会のウェルビーイング（Well-being）の実現**につながるものと考えます。
- 【審議事項】① 2040年以降の社会を見据えた高等教育が目指すべき姿、② 今後の高等教育全体の適正な規模を視野に入れた、地域における質の高い高等教育へのアクセス確保の在り方、③ 国公私の設置者別等の役割分担の在り方、④ 高等教育の改革を支える支援方策の在り方

スライド 9

本フォーラム趣旨

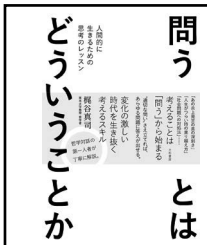
- 新学習指導要領に基づく授業が全ての高等学校で実施、各教科等での探究や「総合的な探究の時間」が展開されている。**主体的・対話的で深い学び**を実現していく上では**探究**が欠かせず、**問いを見つけることで探究は始まる。**
- 高校生そして大学生が**良い問い**を見つけるにはどうすればよいか。それには、**多様で複雑な問題の本質を捉えて課題を設定し、創造的な解決へ**と導いていけるよう、**問いをデザインする力を形成**することが求められよう。

スライド 10

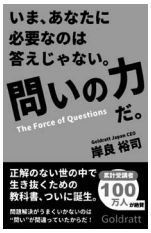
本フォーラム趣旨

- 高大接続改革にあっては、高等学校教育、大学入学者選抜、大学教育の各段階が一体となって、**問いのデザイン力**をどのように高めていくのか、その**共通理解とつながり**が一層重要になっている。
- 近年はこの**「良い問いとは何か」**や**「問いのデザインとは何か」**についての出版も相次いでおり、高校・大学はもとより、社会全体の関心事になっているといえよう。

スライド 11



梶谷真司『問うとはどういうことか―人間的に生きるための思考のレッスン』、大和書房、2023年8月
私たちは、なぜ問わないのか？
・問うのは、基本歓迎されない
・問うのは、しばしば攻撃的である
・問いは、"与えられるもの、である



岸良裕司『いまあなたに必要なのは答えじゃない。問いの力だ。』、2023年2月
正解のない社会をどう生きるか？誤った問いから良い答えは見つかるのか？

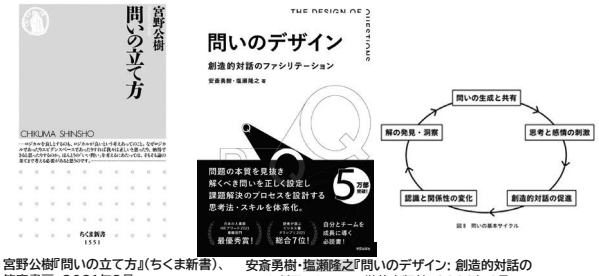
ハル・グレガーセン、黒輪篤嗣（訳）『問いこそが答えだ！―正しく問う力が仕事と人生の視界を開く』、光文社、2020年3月

スライド 12

ダン・ロスタイン、ルース・サンタナ、吉田新一郎（訳）『たった一つを変えるだけ：クラスも教師も自立する「質問づくり」』、新評論、2015年9月

第4章 **生徒たちが質問をつくる**
ルール1 できるだけ**たくさんの質問**をする
（質問する許可を与える）
ルール2 質問について話し合ったり、評価したり、答えたりしない
（**安心・安全な場を提供する**）
ルール3 質問は発言のとおりに書き出す
（すべての声を尊重する）
ルール4 意見や主張は**疑問文に**直す
（主張ではなく、**質問の言い回しや問い方にこだわる**）

スライド 13



宮野公樹『問いの立て方』(ちくま新書)、筑摩書房、2021年2月
第一章「いい問い」とは何か
第二章「いい問い」にする方法
第三章「いい問い」の見つけ方

安斎勇樹・塩瀬隆之『問いのデザイン: 創造的対話のファシリテーション』、学芸出版社、2020年6月

スライド 14

藤原さと『「探究」する学びをつくる: 社会とつながるプロジェクト型学習』、平凡社、2020年12月
探究は「不安定な状態」から始まる

藤原さと『協働する探究のデザイン: 社会をよくする学びをつくる』、平凡社、2023年5月
人生にとって大事な問いを見つけるために

スライド 15

佐藤浩章『高校教員のための探究学習入門―問いからはじめる7つのステップ』、ナカニシヤ出版、2021年3月
ステップ2: 問いをつくる
1 探究に不可欠な問いづくり
2 子どもはたくさん質問をする
3 問いづくりはイノベーションにつながる
4 「生徒が問いをつくる」教育に変える

酒井淳平『探究的な学びデザイン 高等学校 総合的な探究の時間から教科横断まで』、明治図書、2023年2月
[課題設定]生徒のマイテーマを育てる視点を大切に
[教科の授業づくり]「問い」で教科の授業を探究的にする
問いを立てる授業 **生徒が**学ぶ意味を探究し、**学ぶ意味を自ら発見する**
「探究」と教科の授業をつなぐ **問いづくりを通して、自己の在り方生き方を考える**

スライド 16

トーマス・S・マラニー、クリストファー・レア、安原和見(訳)『リサーチのはじめかた―「きみの問い」を見つけ、育て、伝える方法』、筑摩書房、2023年9月
自分中心の研究者になる　きみの問題は？
自分の枠を超える

イアン・レズリー、須川綾子(訳)『子どもは40000回質問する　あなたの人生を創る「好奇心」の驚くべき力』、光文社未来ライブラリー、2022年5月
ヒトは好奇心のおかげで人間になった
子どもの好奇心はいかに育まれるか
好奇心格差が社会格差を生む

スライド 17

「問い」と子どものための哲学(Philosophy for Children, P4C)

- マシュー・リップマン、河野哲也(監修)ほか『探求の共同体 ―考えるための教室―』、玉川大学出版部:、2014年6月
- 豊田光世『p4cの授業デザイン 共に考える探究と対話の時間のつくり方―』、明治図書、2020年4月
  第4章　p4cは「問い」から始まる
  第5章　探究のコミュニティを育む
- M.R.グレゴリー、J.ヘインズ、K.ムリス、小玉重夫(監修)ほか『子どものための哲学教育ハンドブック　世界で広がる探究学習』、東京大学出版会、2020年10月
- 小玉重夫(監修)、田中伸・豊田光世(編)『対話的教育論の探究: 子どもの哲学が描く民主的な社会』、東京大学出版会、2023年9月

スライド 18

国際バカロレア(IB)の学習者像(The IB Learner Profile)

【10の人物像】
- 探究する人
- 知識のある人
- 考える人
- コミュニケーションができる人
- 信念をもつ人
- 心を開く人
- 思いやりのある人
- 挑戦する人
- バランスのとれた人
- 振り返りができる人

【探究する人】
- **私たちは、好奇心**を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。

※「知の理論」(TOK)

IBの使命(The IB mission):
国際バカロレア(IB)は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、**探究心**、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。・・・

(出典)国際バカロレア機構『国際バカロレア(IB)の教育とは？』2017 年4月

スライド 19

高等学校学習指導要領「総合的な探究の時間」

第1 目 標

探究の見方・考え方を働かせ，横断的・総合的な学習を行うことを通して，**自己の在り方生き方を考えながら**，よりよく**課題**を**発見し**解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

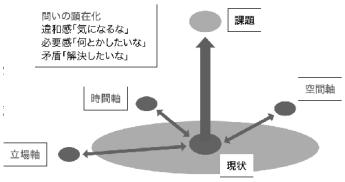
(1)**探究の過程**において，**課題**の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け，**課題**に関わる概念を形成し，**探究の意義や価値**を理解するようにする。

(2)**実社会や実生活と自己との関わり**から**問い**を見いだし，**自分で課題**を立て，情報を集め，整理・分析して，まとめ・表現することができるようにする。

(3)**探究**に**主体的**・協働的に取り組むとともに，互いのよさを生かしながら，**新たな価値を創造し，よりよい社会を実現しよう**とする態度を養う。

スライド 20

学習者自身の問い、課題の設定、
そしてリサーチクエスチョンへ



（出典）文部科学省「今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開　未来社会を切り拓く確かな資質・能力の育成に向けた探究の充実とカリキュラム・マネジメントの実現」2023年3月　pp. 21-22, p. 34

- **問い**や**課題**は，必ずしも既有の知識や経験から生まれるとは限らない。実社会や実生活と実際に関わることで，**時間的な推移の中で現在の状況が問題をもっていること，空間的な比較の中で身の回りには問題があること，自己の常識に照らして違和感を伴う問題があること**などを発見し，それが問題意識となり，**自己との関わり**の中で課題につながっていく。
- このようにして**生徒の中に生まれた問いや問題意識**が切実な課題として設定され，**より明確な**「質の高い課題」**として洗練されていくプロセスや時間を確保する**ことが大切である。具体的には，**課題に関することを幅広く調べたり，一人でじっくりと考えたり，様々な考えをもつ他者と相談したりするなどして，行きつ戻りつしながら，生徒が自らの力で探究を進めるための原動力となる**「リサーチクエスチョン」**を設定する**ことと考えることができる。

スライド 21

本フォーラム趣旨

- 今回のフォーラムでは、「**良い問い**」を介して、高校から大学への共通基盤を探る。
- **高校生**がどのように**問い**に出会い、**探究**を深めていくようデザインできるのか、また**大学生**は形成した**問いのデザイン力**を大学での学びに活かして、どのように**探究から研究へ**と展開させていくのか、高校と大学の当事者が共に課題を共有し、考える機会とする。

スライド 22

【第1部】
○基調講演1
協働する探究と問いのデザイン
～学習指導要領における資質・能力の3つの柱と連携させて～
藤原さと氏（一般社団法人こたえのない学校 代表理事）
○基調講演2
問いづくりの今、そしてこれから
～問いと問いづくりをめぐる思考と実践の旅～
佐藤賢一氏（京都産業大学生命科学部 教授／
NPO法人 ハテナソン共創ラボ 代表理事）
○フロア参加型鼎談　ファシリテーター　塩瀬隆之氏
（京都大学総合博物館 准教授）
【第2部】 3つの分科会と2つの特別分科会
【情報交換会】

スライド 23

本日は、第1部、第2部とも、対面にて開催いたします。また、情報交換会も実施します。

最後まで、ぜひご参加ください。

ご一緒に有意義な議論ができますことを心より願っております。

ご清聴ありがとうございました